

ふるさと応援団木島平会会報

調布っ子が木島平の夏を満喫

調布市の小学生 30 人が、8 月 4 日から 8 日までの 4 泊 5 日の日程で、農山村体験ホームステイで木島平を訪れました。この企画は姉妹都市盟約 25 周年の記念事業として行われ、募集定員 30 人に対して 80 人以上の応募がありました。

期間中は、2 人ずつ 15 軒の農家に分かれ滞在し、ある農家では川遊びやバーベキュー、野菜の収穫など都会ではできない体験を行い、木島平の夏を楽しみました。

連日猛暑の中、子どもたちは汗びっしょりになりながらも自然豊かな木島平を駆け回って遊んでいました。貴重な体験ができたこと、木島平の友達が増えたことなど、それぞれ良い思い出として心に刻まれたことでしょう。



会員のひびく

思い出 昭和 20 年 8 月 15 日終戦の前後

あの頃、全ての物は配給制で自由に物を買うことが出来なかった。農家も米は強制的に供出させられて、白いご飯を食べる余裕がなく、学校では弁当の検査があり、混ぜ物のない白いご飯だけの弁当に後ろめたさを感じ、自分で色々な混ぜ物した嫌な記憶が今も想いだされる。

姉が結婚することになり、嫁入り道具を取り揃えるのに父は大変苦労した。当時点数制度で一世帯何点ということ、点数がないと、物を買えない時代でした。何軒もの家から点数を融通してもらい、嫁入り道具を取り揃えた父の苦労がしのばれる。

父が西町の配給部長をしていたのでどんなものが配給されて、どのように配分されたか、魚はサシのわいたものもあり、評判が良くなく食べるとすっぱい味がした。糸は白糸は二メートル、黒糸は一メートルと短くきつて配分した。困ったのはサラシ布一反は手ぬぐいの長さに切って分配するのだが、妊婦が腹巻用に一反欲しいといっても、点数と何軒かの同意が必要でした。

鯉の缶詰めが配給になり、みんな喜んで受け取りに来るだろうと言っていたら誰も受け取りに来ない、催促してもみんな来ないと言う。返そうかと言っても、役場は返されても困ると言うので家で保管する事になった。そんな噂を聞きつけた人（東京から疎開していた）が、お米を買うより安いからと引き取ってくれて、その代金を手にした父はほっとしたのか嬉しそうだった。その手に百円札があった。父も私も初めてみる百円札だった。

石川幸雄